

講座敦煌 5

敦煌漢文文獻

大東出版社

講座敦煌5 敦煌漢文文獻

平成四年三月二日 初版印刷  
平成四年三月一九日 初版発行

責任  
編集者

發行者

印刷所

製本所

池田温

岩野文世

興英文化社

関山製本社

發行所

株式会社 大東出版社  
東京都文京区白山一―三七―一〇  
電話(〇三)三八一六―七六〇七

ISBN4-500-00454-8 C1320

W45/13

第五卷責任編集

池田 温

監修

塚本善隆

入矢義高

榎一雄

秋山光

編集委員

金岡照光

池田温

福井文雅

## はしがき

本講座の企画は一九七九年（昭和五四）初から始まり、翌年四月刊行開始、本巻は八二年一月に第一一回配本予定であった。従って本巻の過半の執筆は八〇年から八一年にかけて進められたのである。ところが予期に反し第五・六・七回配本予定の巻の執筆が大幅に遅れ、講座は頓挫を来たし、出版社は当初の一三巻計画を九巻に縮少して継続することとなり、八三年暮から配本が再開され昨年春に八回目の配本を経て、ようやく本巻の完成にこぎつけたのである。多年辛棒強く本書の刊行を待って下さった読者諸賢、及び本来の期限までに寄稿され約一〇年修訂に骨身を削られた執筆各位の寛容に対し、編者として心からのおわびと深謝を捧げたい。

この間一九八三年に中国で敦煌吐魯番学会の成立をみ、敦煌研究は世界的に空前の盛況を現出し今日に及んでいる。八〇年に四冊刊行されて以来一〇年余、ようやくここに九巻揃うこととなった本講座が、斯学の画期的発展に拍車を加えてきたことは疑いなく、既刊講座中の少なからぬ諸篇が既に漢訳されているのをみても、その一端が窺われよう。本書の内容は、第四巻『敦煌と中国道教』第七巻『敦煌と中国仏教』第八巻『敦煌仏典と禪』及び第九巻『敦煌の文学文献』と併せて、敦煌漢文写本の概要を讀者に示し、その投げかける諸問題について展望を試みるものである。

始め一四の項目を予定したが、一〇年間に占書・書儀及び写本の価値三項が加わり、頁数も八割方増加を見た。この講座で本巻ほど多様な専門家の協力になるものは他にないといつてよい。フランスの吳其昱<sup>ウイチニク</sup>、中国の周一良<sup>ジューワイリヤン</sup>・王三慶<sup>ワンサンチン</sup>、三氏を交え国際色も豊かである。本場の中国には、莫高窟と蘭州にある敦煌研究院をはじめ、北京大・北京師院・西北師大・杭

新疆维吾尔自治区社会科学院に夫々立派な敦煌吐魯番学資料中心が設けられ、更に北京大・北京師院・西北師大・杭州大等にも敦煌学研究室が活動しており、台北の中国文化大中文研究所の敦煌学研究会の事業とともに、研究の進展

を支えている。それに比しわが国では、敦煌学に関心を寄せる者は数百名に上るが、その為の研究機関はもとより専門学会すらまだない。しいていえば東洋文庫研究部の若干の関係者と龍谷大学西域文化研究室等の努力がみられる位で、研究の第一線は個人か Young Tonkologist や吐魯番出土文物研究会の如き数名の小グループによって担われており、フランスのペリの敦煌研究グループ (URA 1063) の活発な仕事ぶりなどに較べても著しく立遅れている。その中で国語・国史・宗教史・思想史・科学技術史・中国史・書誌学・法制史・歴史地理・書道史等領域を相異にする斯界一流の十数名が、本書に結集することができたのは天の配剤といえるであらう。

本巻の進行が遅れた原因の一つは、概観を執筆された呉博士の脱稿時期に制約された結果であり、あくまで自己のペースで撰述を進める敦煌学の為に生れてきたような博士に、我々は無言の鞭撻を受け続けた感がある。幸い敦煌学隆昌の時運に際会し、本来計画した規模に倍する本書ができたことは、『敦煌胡語文献』の巻と同様、世間万事塞翁が馬の想いを禁じ得ない。

一〇年を経る間に執筆者についても一部変更を生じ、暦・算書は藪内清先生から宮島一彦氏に引きつがれ、類書は勝村哲也氏が他の仕事に没頭され寄稿が間に合わなくなり、王三慶氏に代って執筆を仰いだ。また書の項に付す計画であった用紙・筆墨・印章については、頁数の制約もあり今回は見合わせざるを得なかった。

本巻に当然含まるべくして欠けている項は、用紙等に限らず、諸子類や私文書の書翰や社文書等少くない。又近年の急速な学界の進歩に追いつくことは容易でなく、記述内容に一部アップデートといえぬ面が存する点は遺憾であるが、種々已むを得ぬ条件に規制された結果であり、読者の寛恕を乞う次第である。

最後に久しい期間に亘り本書の編集公刊に尽力された高山博・進藤淑子・松浦可一・宇衛康弘諸氏の辛勞に感謝し、本書が敦煌研究にいささかでも寄与し得ることを念じて撰筆する。

一九九一年十二月

池田 温

第五卷

敦煌漢文文獻

責任編集

池田

溫

凡 例

1 本文の表記は、当用漢字・現代かなづかいで統一した。但し、敦煌文献に頻出する異体字や、固有名詞・引用文などの特殊な場合は、この限りではない。

2 チベット語・その他西域諸語・サンスクリット語等の非西欧語の場合は、原則としてローマ字表記とした。

3 本文中の暦年は原則として西暦で表示し、必要に応じて中国・日本の年号等を( )の中に記した。但し逆の場合もある。

例 一九〇三年(光緒二九)

昭和五年(一九八〇)

4 外国語文献(漢文文献を含む)よりの引用文はできる限り邦訳したもの(現代語訳・訓読書き下し文)を掲げ、日本語による論文等の場合は、原則として原文通りとした。

5 書名・経典名・写本名等には「」を付し、章篇名や学術雑誌所収論文名等には「」を付した。

また、多出する文献名には、必要に応じて、略称・略号を用い、次のように記した。

例 『大正藏』五三卷、二〇頁a (大正新脩大藏經第五三卷、二〇頁、上段、を意味する)

6 スタイン本・ペリオ本・北京本等、敦煌の写本には略号を用いて、左記の如く表示した。

スタイン本 S二二三一

ペリオ本 P五〇六一

北京本 天五六

台湾中央図書館本 台湾一二七

レニングラード本 レニングラード目三三六四

目次

はしがき(池田温)

I 敦煌漢文写本概観…………… 吳其昱 伊藤美重子訳…………… 一

一 序説―敦煌史時期区分…………… 三

二 漢文写本通説…………… 七

(一) 写本の発見と流布…………… 七

(二) 影印本と目録の刊布…………… 九

(三) 写本の題材、史料価値と使用言語…………… 一五

(四) 卷子、冊子、紙墨、刻本と拓本…………… 一七

(五) 字体、武后新字、常用記号、避諱闕筆…………… 一七

(六) 不知名経巻と写本時代の鑑定…………… 一六

三 漢文写本各説…………… 一六

(一) 敦煌写本四大収蔵漢文文献の主内容(仏教常見文献)…………… 一六

1 既刊の目録による四大収蔵の内容構成の概観…………… 一六

a ロンドン蔵本…………… 一六

b バリ蔵本…………… 一三



	c	北京蔵本	三
	d	レニングラード蔵本	四
	2	敦煌仏經の出現頻度と中国仏教史特有現象の関係	四
	(二)	孤本仏書	五
	1	禅宗文献とそれに関する問題	五
	2	中唐新訳経論と中世経疏	六
	a	法成	六
	b	曇曠	六
	3	中世偽経	六
	4	寺院文書と寺院経済史料	七
	(三)	その他の宗教典籍	七
	1	道教文献	七
	2	景教(Nestorianism)文献	八
	3	摩尼教文献	八
	(四)	非宗教文献——敦煌出土経史子集	九
	1	経部	九
	a	古文尚書	九
	b	敦煌韻書	一〇
	2	史部	一〇

3	子部	二二
a	敦煌曲	二二
b	琵琶譜	二三
c	舞譜	二四
d	碁経	二六
4	集部	二六
a	王梵志詩集	二六
b	変文	二八
四	結語	三六

〈附録〉

II	中国書法史上から見た敦煌漢文写本	伊藤伸	三三
----	------------------	-----	----

目次			
一	はじめに		一〇
二	西晋の書		一〇
三	河西の書		一六
四	南朝の書		一七
五	北朝の書		一九
六	結語―再び、「南北書派論」―		三三
III	敦煌の加點本	石塚晴通	三九

一	加點	三
二	漢文加點本の沿革	三五
三	敦煌の加點本	三六
IV 儒教典籍		
	概観	三五
一	『易』	三七
二	『書』	三七
三	『詩』	三三
四	『春秋』・『礼記』・『爾雅』	三六
五	『論語』	三六
六	『孝経』	三九
七	『正義』	三九
八	『經典積文』	三二
V 史籍		
	一 はじめに	三五
	二 正史	三六
	(一) 紙背本との関係	三九
	尾崎 康	三三

(一)	書写年代と避諱欠筆	三三	
(二)	『漢書』欠名者注について	三六	
(三)	略出本(抄録本)	三〇	
(四)	『三國志』步騭伝	三三	
(五)	別史・雑史・伝記(正史以外)	三五	
VI 地理書			
はじめに			三三
一 総 志			三五
(一)	貞元十道録(擬定)	三五	
(二)	諸道山河地名要略	三七	
(三)	地志残卷	三九	
二 方 志			三三
(一)	沙州都督府図経	三三	
(二)	沙州志断片・沙州城土鏡・寿昌県地鏡・敦煌録	三五	
(三)	沙州伊州地志	三七	
(四)	西州図経	三六	
(五)	地志残欠	三九	

	三	名勝志・遊記	三〇
	(一)	諸山聖蹟志(擬定)	三〇
	(二)	五臺山巡礼記(擬定)二種	三一
	(三)	慧超往五天竺国伝	三三
	(四)	大唐西域記	三五
	(五)	西天路竟	三五
VII 類書			
	一	前言	三七
	二	敦煌写本中の類書	三〇
	(一)	旧文排列体―旧文故事を抄録し、 聯類排比した類書写本	三〇
	1	『修文殿御覽』	三〇
	2	『類林』	三一
	3	『事林』一卷	三一
	4	『事森』	三一
	5	『瑠玉集』別本	三二
	6	『未詳類書甲』	三二
	7	『勤読書抄』	三五
	8	『心機抄』	三五
		王三慶 池田温訳	三五

9	『新集文詞教林』	三六
10	『新集文詞九經抄』	三六
11	『励忠節抄』	三六
12	『未詳類書乙』	三七
13	『未詳類書丙』	三七
14	『未詳類書丁』	三七
15	『未詳類書戊』	三七
(一) 類語体		
1	『語対』	三七
2	『鑑金』	三〇
3	『対語甲』	三九
4	『対語乙』	三九
5	『類辞甲』	三〇
6	『類辞乙』	三〇
7	『類辞丙』	三〇
(二) 類句体		
1	『北堂書鈔体甲』	三二
2	『北堂書鈔体乙』	三二
3	『北堂書鈔体丙』	三二

4	『北堂書鈔体丁』	三三
5	『北堂書鈔体戊』	三三
6	『北堂書鈔体己』	三三
7	『北堂書鈔体庚』	三三
8	『類句甲』	三三
9	『蒙求』	三三
10	『歲華紀麗体甲』	三四
(四) 詩体		
1	『李嶠雜詠』	三四
2	『古賢集』	三五
(五) 文賦体		
1	『兔園策府』	三六
2	『文賦体類書甲』	三六
3	『文賦体類書乙』	三六
4	『文賦体類書丙』	三六
(六) 何論体書抄		
1	『雜抄』	三七
2	『節本珠玉抄』	三七
3	『何論体類書甲』	三八

目次		
三	敦煌類書の特徴	三九三
四	敦煌類書の機能	三九四
五	敦煌類書の今日における価値	三九七
六	結語	四〇〇
VIII 訓蒙書		
一	序言	四〇三
二	訓蒙書の範圍	四〇四
三	従来の研究	四〇八
四	敦煌文献中の『千字文』	四一三
五	李暹の『注千字文』	四一七
六	敦煌本の『注千字文』	四二〇
	敦煌本『注千字文』	四二五
IX 占筮書		
一	菅原信海	四二九
二		四三一
三		四三三
四		四三七



五	.....	四五〇
六	.....	四四五
七	.....	四六〇
X 曆書・算書		
一	曆書関係	四六三
二	算書	四六六
XI 敦煌本の本草医書		
一	はじめに	四七〇
二	本草	四七二
三	五藏論	四七七
四	その他	四八〇
五	結論	四八五
XII 敦煌資料と唐代法典研究		
——西域発見の唐律・律疏断簡の再検討——		
	はじめに	四九〇
一	唐名例律断片(S九四六〇・一背)	四九三
二	職制律断簡(麗字八五号贴付)	四九七
	岡野 誠	五〇〇